ART KISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE　創刊号　2001.7.15

●美術館関係面積　7,837㎡(倉庫室、モの他階段等共有部分含む)
●メインギャラリー、ホームギャラリー(ライブラリー)、記念室・市民ギャラリー、情報コーナー、ティーラウンジ、ミュージアムショップ、多目的ホール、制作室、会議室など

創刊のごあいさつ

来年２００２年の秋に熊本市現代美術館(仮称)がオープンします。
私たちは、この熊本に住み、制作活動に励むアーティストをなによりも応援します。
そして、世界と日本の芸術文化を、現代的な視点で、分かりやすく紹介する
美術館でありたいと思っています。
この「アート・キッス・レター」は、美術を愛する皆さんと美術館をつなぐ手紙です。
そして、この「レター」を、サロンのような交流の場としたいと思っています。
絵画から書道、いけばなまで、芸術表現に関わる皆さんを応援する「レター」。
美を愛する思いを伝え合うための「レター」。
そうした思いを込めて、この「アート・キッス・レター」をお届けします。

熊本市美術文化振興財団美術専門員　**田中　幸人**

2001.5.1～5.15のギャラリー展評

ART DE GYAN

アート・ド・ギャン

※もう、おわかりですよね！熊本弁で「アート、どう？」の意です。

熊本岩田屋6F美術画廊

熊本市坪井町3-22 ☎322-1111

●「四季の花日本画掛け軸展」（五・一～五・七）には、四季折々の花、植物と小動物を描いた掛け軸が並んだ。肌に感じる空気を心地よく表現してあって、改めて日本画の顔料、岩絵の具の力を感じさせた。「のつ」と描かれた筆に、またこころも動かない赤白の紫陽花に熱線の技が光った。

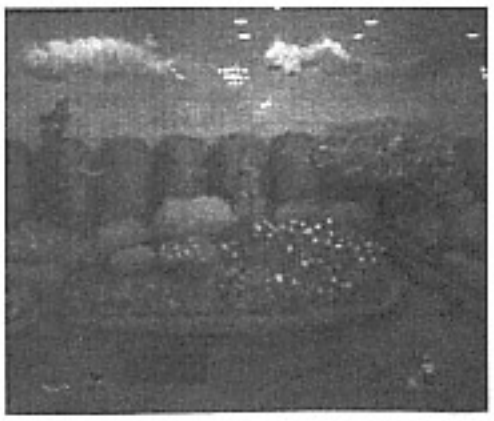
●「信楽　天水内田哲二作陶展」（五・九～五・十四）は、熊本出身の陶芸家、内田哲二さんの個展。彼は一〇年前ごろから金属的な質感に魅せられ、結晶のある釉薬を用いて、陶器を制作している。陶ならではのやわらかくあたたかい造形とあいまって、メタリックな輝きを放つ作品は、渋さに傾きがちな陶芸の世界にあって、はっと目をひく新鮮な印象を与えていた。（K・K）

アートスペース大雲堂

熊本市上通5-6 ☎354-2155

●「第三五回酉美会」（五・二～五・八）は、医師として仕事をしながら、絵を描き続ける酉美会メンバーの第三五回春のグループ展。画家として活躍する方の、洗練された絵画も並び、見ごたえがあった。そのロで、童画のように素朴な味わいの絵が何点か出品され、純粋な美しさへの希求を強く感じさせた。作家自身が、作画することにより癒され、またそれを見るものもその作用を受け取るという、前作活動のもっとも基本的な部分がこれらの作品に現れ、心が洗われた。

●「セブンクラブ水墨画個展」（五・九～五・十三）は、水墨画家・故丹邊盛川氏のもとで学び、現在はそれぞれ水墨画の軽妙を持つ七人の方々の展覧会。一人の師に学んだとは思えないほど、それぞれ画風がまったく違い、絵を学ぶということが、表面的なものではないことを実感させる。白黒の世界でありながら、完全に色彩を感じさせる。一点一点に引きこまれた。（K・K）



《バラが咲いた》　田原田三さんの作品

ギャラリー萌

熊本市水前寺6-27-20 ☎383-7001

●グランドピアノの置かれる店内で、テレビから国会中継が流れ、客が何人かコーヒーを飲んでいた。絵画をできるだけ多くの人に、遠慮なく楽しんでもらいたいと語るオーナーのギャラリー・レストラン。この気楽な空気の中、油彩と淡彩の小さな展覧会、「ギャリティー絵画展　橋本雅斉・夏山起」（五・一～五・三十一）が開かれていた。風景画が中心。作家の橋本さんは、今回出品した作品には大きなテーマはなく、熊本の自然から感じることを絵にしていると話してくれた。食事をしながら見る絵には、肩の力を抜いた絵がぴったりとオーナーは言う。自然着のアートを楽しめた。（K・K）

作家の橋本雅斉さん

上通郵便局プラザU

熊本市水道町3-37-1F ☎326-4123

●「銅板彫刻　松本学展」（五・一～五・六）は、初個展である。横浜在住の夏井氏の作品から影響を受け、銅板工芸をはじめ、熊本県技能芸術で、講習会、勉強会を開催しているが、根気の要る作業のため、なかなか後続が増えないと悩みを語る。会場でも、銅板工芸の取り付き易さを減らそうと、製作過程、見本を展示するなど工夫をしていた。変色をかけて酸化させることで独特の玉虫色を出すが、失敗すると真っ黒になってしまうなど、かなりの技術が必要であることをうかがわせる。

●「春のばら展」（五・七～五・一〇）は、男女約四〇名からなるグループ・ロゼヴァンサンカンのメンバーによる生花とちぎり絵を展示した。春・秋と年二回の展示活動は今年で十三年目になる。八〇歳のメンバーによるちぎり絵は、他のメンバーが丹精こめて咲かせた色とりどりのバラの中でも、ひときわ美しくみえた。（H・T）

松本学さんの作品

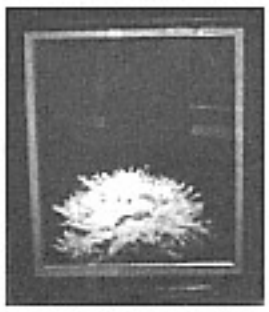
ギャラリー喫茶去

熊本市千葉城町3-7 ☎359-0132

●以前のような貸しスペースではなくなり、親しい作家を中心に展覧会を企画していく方向に転換した。

今回は、田代昇三さん・小林孝夫さん・柴川右臣さん・林典子さん・土野精二さんによる「五人展」。静物画、風景画、肖像画、抽象画などバラエティに富んだ作品が展示されたがそれぞれの作品が響き合い会場全体がひとつの作品であるかのような印象を与えている。

春の季節感が、雪の残雪や、桜と青空を主題にした作品に現れた。（H・T）



《八分咲》　土野精二さんの作品

鶴屋百貨店8階

熊本市手取本町6-1 ☎356-2111

●「現代印象派」（ミル・クレマン来日展（五・二～五・八）、アール・ヌーヴォーガラス工芸展（五・二～五・八）、片岡鶴太郎の版画展（五・八～五・十三）が行われた。（H・T）

アートギャラリー・コレクションOMO（オモ）

熊本市上通町4-14-3F ☎356-4721

●「アート楽楽市場」というセールを開催、版画を中心に、その他オブジェやジュエリーなどを展示する。スペインの現代芸術家アントニ・タピエスや、草間彌生などの版画を展示。「VOIX」誌は、ここで購入できる。（H・T）

熊本県伝統工芸館

熊本市千葉城町3-35 ☎324-4930

●「宇土半島の工芸展」（五・二～五・六）では十八工房十九名が、染織、家具、石物、人形、木彫、竹細工など約三〇〇点を出品。蒲土窯の前田和さんは植物を押し付けて、形を写し取り、彩色、焼き付けの三法で、陶板、ランプ台、皿鉢などを制作している。またひとつの仕上げまで約三ヶ月を要する、能面制作の荒木孫さんは約二〇年で約六〇種八〇面を完成したという。

●「土紋窯／食卓と感覚を飾る花の器展」（五・二～五・六）で、松山一之さんは大板、ふくろうなど親しみのあるモチーフを用いる。一輪挿しとナイフレストや置きなどは、使うひとのアレンジの幅も広い個性的なデザインである。

●「吉弥さんまい「詩洗布で造った世界展」（五・二～五・六）は、古い絣などから触発されて洋服をデザインしている中川孝子さんの作品展。幼少のころから離れてきた故に、制作が楽しくなっていると語る。大島を使ったコートは新鮮で、山繭や胡桃の木の皮で編んだ籠もよい。

●「天・土・風／天草の一〇人による丸尾焼スタッフ作陶展」（五・二～五・六）の出品作家は平均二七才という。経験二年の岡田留美さん（七二年生まれ）は、信楽の粗めの土を好むといい、親しみのある作風となっている。

●「宮崎・綾町　ひむか色工芸展」（五・八～五・十三）は、ひむか色グループ一〇人による陶器、染織、染色、木工、漆器、人形の作品展。木工の吉村満さんの桐材を用いた温かみのある箱類、また陶芸の川村醤次さんによる、すっきりとしたフォルムのランプシェードが話にとまった。

●「創立二〇周年記念　西部金工展」（五・八～五・十三）は、九州・山口の金工家による西部金工協会は、発足二〇周年を記念した展覧会である。十六名の会員中十三名が参加しており、うち六名が熊本出身で、坂田道さんはネクタイピン、石見且子さんはペンダントなどのアクセサリーを出品。

●「OH・YOKO展」（五・八～五・十三）は、久保洋子さんによる花美紫染めの新作展で、デザイン、制作を手がける。空間構成は能光島国分の五回目になる。作品と空間が常に新鮮な緊張感を生み、展覧会開催の楽しさを増すと語る。使用するキツネノマゴ科の琉球藍はクチ科の藍よりも濃く、深みのある色であった。

●「高井綜玄　仏像彫刻展」（五・十一～五・十三）も開催された。（Y・H）

ギャラリー・キムラ

熊本市水道町3-5（上通Kビル8F） ☎327-0156

●「花たちの詩（パート・トーV）」（四・二〇～五・八）は個展は四度目になる松尾大俊さんがムスカリなどの植物を優しい筆致で描く。

●「エコルシェ展6」（五・七～五・十三）は熊本県内七人グループによる絵画作品展で、今回は十五点展示された。高木朝英さん（作品（半骨より））は精神的な深さを感じさせる静物画であった。（Y・H）

作家の松尾大俊さん

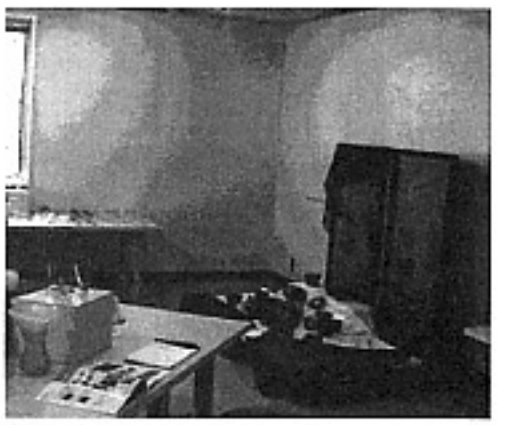
絵画作家の高木朝英さん

作家の川三間英さん

ギャラリー・ひまわりハウス

熊本市坪井町3-22 ☎322-1111

●「BR・The Personalities of Glassworks」(五・二～五・七)は、春にオープンしたスペースでの五組六人のグループ展。生活のいろいろなシーンに用いることができるガラスの器、ガラス・ビーズなど、多種展示していた。(Y・H)



展示風景

スペース・レインボー

熊本市新市街10-7(シャワー通り) ☎324-0387

●一陸府孔子作陶展(五・二～五・七)では、皿、小鉢など多種展示のなかで、特に花器が洗練された力強さをもっていた。(Y・H)

《花器》 陸府孔子さんの作品

四季の彩

熊本市上通4-1Dトラヤビル ☎351-8332

●「紫夏の会」(五・一～五・一〇)は、華やかで個性豊かな女性らしさの感じられる展示だった。(K・T)

●「古橋貴治　メタルワークス展」(五・十一～五・二十二)では、カウンター習作の横長の作品は、メタルに施した加工が強調を生み、ニュアンスに富んだ仕上がりとなっている。全体的に、メタルという素材の持ち味を生かしているのは、色彩を抑えた作品であった。(Y・H)

熊田美術館ギャラリー&熊田美術館守護神

熊本市島崎4-5-28 ☎352-4597

●「山本幸一の「陶器」展」(四・二八～五・八)の山本さんは、小石原とイタリアに学んだ後、金峰山に窯を構え二十余年、土に向かってきたベテランである。急須、ティーポット、片口、ピッチャー、徳利、醤油差しなど多岐に渡る「陶器」には、作風の洗練と余裕が感じられた。とりわけ、高さ四〇センチはあるかという蓋つきピッチャーのシリーズは、量感たっぷりで、真摯を隠らし出す力作のように存在感十分であった。

●「Crystalline Glazes～結晶釉序章～陶美原作陶展」(五・三～五・十五)の岡さんは今回が初個展。大学を卒業後、伊賀上野で陶芸を学び、羽山に移り住んだ彼女が出会ったのが結晶釉(Crystalline Glazes)であった。結晶釉は日本ではなじみが薄いが、釉に用いられた亜鉛が、表面に雪の結晶のような結晶模様を生み出すものである。作品は結晶を生かす半皿、椀が中心で、天草産の磁器土のつややかな白に添えられた色彩の妙が、作者の人柄とあいまって、結晶釉の清冽さを一層ひきたてていた。(A・S)

作家の山本幸一さん

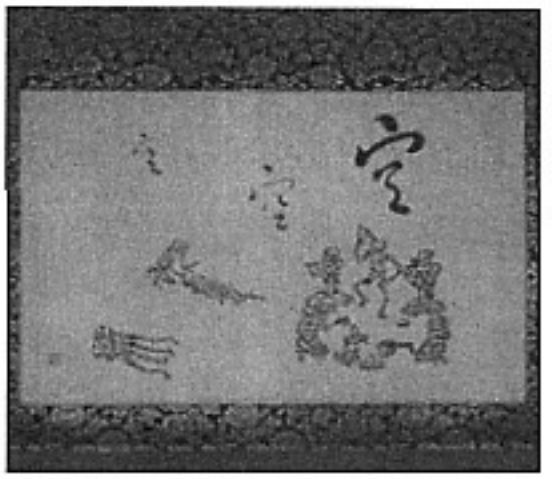
作家の岡美原さん

熊本県立美術館分館ギャラリー

熊本市千葉城町3-35 ☎351-8411

●「中山三青社日展部作品展」(五・二～五・六)は、喜寿を迎えてもなお旺盛に創作を重ねる、中山さんとその門下の書作展示であった。中山さんは書や篆刻にとどまらず、円空仏を小金で模した墨画をはじめとして、絵画、陶工、木工などバリエーション豊かに創作を重ね、正統と軽みが隣り合う懐の広さを感じさせた。

●「第二〇回清美会グループ洋画習作展」(五・八～五・十三)は、末広正治さんの指導の後、野田健郎さんに引き継がれた同会だが、両者を失った現在もメンバー五名で活動を続けている。互いに忌憚しながら褒めているという作品は、人形や季節の花々といった身近な静物や多角度から迫った人物油彩を中心に、色調豊かにかつ堅実に筆が重ねられていた。(A・S)



中山三青さんの作品

画廊喫茶三点鐘

熊本市千草本町3-8有明ビル ☎326-3040

●二十一世紀展、市民美術展コラボレーターの会への出品など精力的に活動を展開する「第一回正木憲明個展」(五・二～五・一〇)。正木さんは退職後に本格的に絵筆を取り始めたが、本展では作品の方向性を追求するべく様々な試行がなされていた。小品であっても、常にテーマを模索する姿勢に対峙が捧げられた熊本城を題材にとらえた作品は今出だが、城の雄壮さというよりも、素朴なたたずまいを詩的なタッチでとらえた作品である。

●「藤川治子油彩展」(五・十一～五・二〇)は、旅の道程で出会った風景を油彩でまとめた作品展。病後の衰えを感じさせない筆の冴えがある。端正な筆致は、長いキャリアが支える確かな技術によるものであろう。欧州の古城を描いた水辺の城では、水面に揺らぐ光のきらめきと城を囲む緑色の壁が響きあい、幻想的な雰囲気を創出している。(A・S)

画廊喫茶ジェイ

熊本市大江本町8-9(熊本本妙寺前) ☎372-8732

●佐々木示治さんについては、ほんの二、三年前の「ジェイと県立美術館分館の個展までは名前も作品も知らなかった。絵を見たときうまい人だと思ったが、日本人と言葉を交わる前に五十代で亡くなられて、今回は遺作展(五・二～五・一〇)となった。

ジェイのママさんによると、鹿児島で描いておられた人で、数年前に天草に移って、こちらで活動を始められたばかりということだった。だから私が知っているのは、数回の個展で見せて頂いた水彩作品だけである。

風景、静物、人物の様々なモチーフをおびた褐色のモノクロームに近い作品は、華やかで明暗の調子が印象的で、きちんと整えられた明・中・暗の調子とシャープな形が魅力的であった。筆の動きが手馴れていて、私にはうますぎる部分もあるように見えて、その辺をどうお感じになっておられたかをうかがいたいと思っていた。お話をするチャンスがあったら、いろいろなことを教えて欲しかったのに、早過ぎた死を残念に思っている。(K・T)

作家の藤川治子さん

作家の正木憲明さん

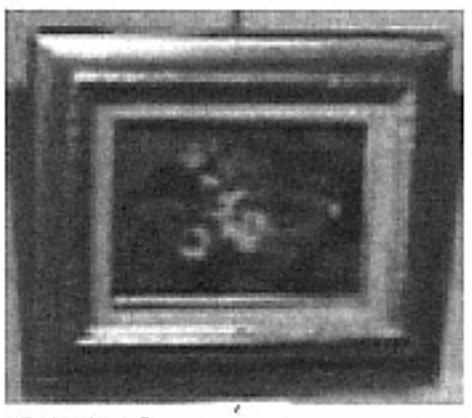
画廊喫茶南風堂

熊本市坪井町5-13坪井ビルF ☎343-9664

●「芸術家の街Ⅰ　西合志町展」(五・一～五・一〇)。南風堂が主催する芸術家の街シリーズ。西合志町、植木町、菊陽町など住む作家を町ごとにグループを作って、毎年展覧会を開いている。洋画、日本画、書など、みんながそれぞれを表現しているのでバラエティに富んだ展示となった。

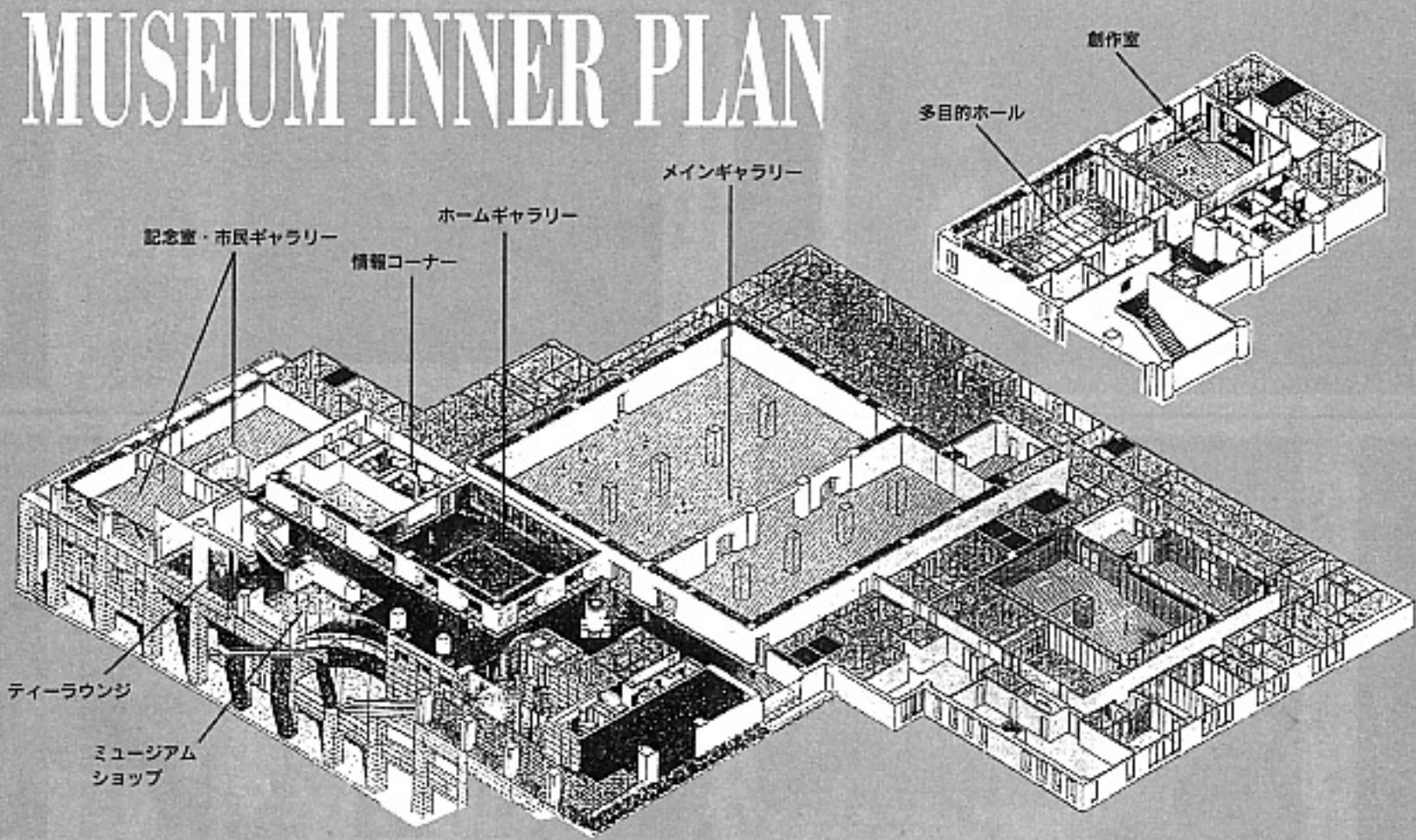
はからずも静物の展示となった諸田雅美さん、歌さん兄弟、日本画で新しい境地を模索する宮本知子さん、水彩画でがんばっている早田一さん、ヨーロッパの風景を独特の視点で描く岡田修也さんなど、今回はプロも含めて、いろいろな展覧会で活躍している十三人の作品展だった。(K・T)

佐々木示治さんの作品



上田美雄さんの作品

MUSEUM INNER PLAN



熊本市現代美術館(仮称)の中を紹介します。
美術館は「びぷれす」ビルの3階と4階の一部にオープンします。
けっして大きな美術館ではありませんが、ジェイムズ・タレル、マリーナ・アブラモヴィッチ、草間彌生、宮島達男といった世界的なアーティストが建築の一部を担当し、誰もが集える「家」のような空間を作り出しました。

本が読めて、コーヒーも飲めて、映像も楽しめる「ホームギャラリー」。
マサチューセッツ工科大学の協力によって、アートとサイエンスのつながりを楽しく紹介する「情報コーナー」。
地元ゆかりの作家を顕彰する「記念室」に、学芸員の目を通して選んだ熊本在住作家を紹介していく「市民ギャラリー」。
講演会はもちろん、様々な演劇やコンサートにも対応した「多目的ホール」。
そして「メインギャラリー」では、世界の「今」を感じさせる様々な展覧会を開催していく予定です。

もちろん、仕事帰りにもゆっくり楽しんでいただけるよう、現代のライフスタイルにあった開館時間を考えています。
美術館が生活の一部として、そして何よりも市民の皆さんの誇りとなるよう、準備室一同、開館準備に邁進する所存です。
開館まであと一年とちょっと。どうぞ、熊本市現代美術館(仮称)のオープンを楽しみにお待ちください。

(各スペースの正式名称は近々発表します。お楽しみに。)

編　集　後　記

「アート・キッス・レター」創刊号をお届けします。私たち「熊本市現代美術館」(仮称)が何よりも大切にしたいのは、ひとりの人間がキャンバスに一本の線を引くときの、ひとつの色を塗るときの、その勇気と覚悟の純粋さというものです。もちろん、初心者からプロ級まで、それぞれの作品には大きな質的な違いがあることも事実です。しかし、私たちの心を揺り動かすものは、表面上の上手下手ではなく、一筆一筆に込められる表現者のひたむきな生の証、ただそれだけなのです。
この「レター」はそうした純粋な生の表れに対する、美術館からの手紙であり、メッセージにほかなりません。私たちは絵画からいけばなで、あらゆるジャンルの芸術に真摯(しんし)に関わろうとする人々を応援します。どうか思い切った作品を私たちに見せてください。そして、大いに語り合いましょう。美術館がそうした関係の中に生まれてくるものであると信じつつ、この「アート・キッス・レター」創刊号を贈ります。

(学芸課長　南嶌　宏)

発行元／ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.1　2001年7月15日発行／無料
編集人／田中　平人
編集長／南嶌　宏　　担当／冨澤　治子
印　刷／熊本県印刷センター協業組合
発　行／熊本市美術館設立準備室　〒860-8601　熊本市手取本町1-1
TEL.096-328-2747　FAX.096-359-7892

寄稿者紹介

兼城 昌山 (S.K)
Shozan Kaneshiro
毎日書道展審査会員、熊本県書道連盟理事長、書道家。「私はあなたの応援団です。斬新で、音楽の聞の見える作品を期待しています。」

森山 秀吉(淡草) (T.M)
Tansu Moriyama
熊本大学非常勤講師、国際文化交流会事務局局長、書道家、書道教育研究。「こんにちは。熊大に居た森山です。書道展の展評を担当します。」

田代 晃三 (K.T)
Kozo Tashiro
美術学芸指導嘱託員、画家、東光会会員、日展会友。「高み、遠くを目ざす人。急いでも、ゆっくりでも。」

学芸員紹介

本田 代志子 (Y.H)
Yoshiko Honda
西洋近現代美術史「ギャラリーの個性がでる展覧会を望んでいます」

坂本 顕子 (A.S)
Akiko Sakamoto
美術館教育・ワークショップ「幅広い年齢層の作品を期待しています」

金澤 韻 (K.K)
Kodama Kanazawa
美術教育、現代美術文化研究「愛のこもった作品を楽しみにしています」

冨澤 治子 (H.T)
Haruko Tomisawa
18世紀末イギリス美術史「皆さんの力作を楽しみにしています」

→ イラストレーション 熊本デザイン専門学校　グラフィックデザイン科2年　広瀬　宏樹